

浄土

1995・11



人間の性（さが） 藤堂恭俊台下

若者の心模様◇江口法子

智は限りあり、愚は限りなし◇日下部匡信

発想・イメージ・映像◇丸林久信

浄土宗と卓球界◇佐藤行信

白球を追って◇小川有順

【連載】

外国で生活して—————中村良観

共に生きる—————御所野洋幸

誌上特設ざやらりい

遊行期 大島泰生の仏画



咲いたら、幸せ。

楽しい、嬉しい。

ちょっと切ない、なつかしい。

いろんな話をしたり、聞いたり。

そんな何気ないことが、人と人との

固い絆の第一歩。

それぞれの人の、それぞれのお話に

花を咲かせるお手伝い。

安い市外電話の、0088です。

日本を楽しくする電話

0088

お問い合わせ・お申し込みは、日本テレコムお客様センターまでお気軽に。



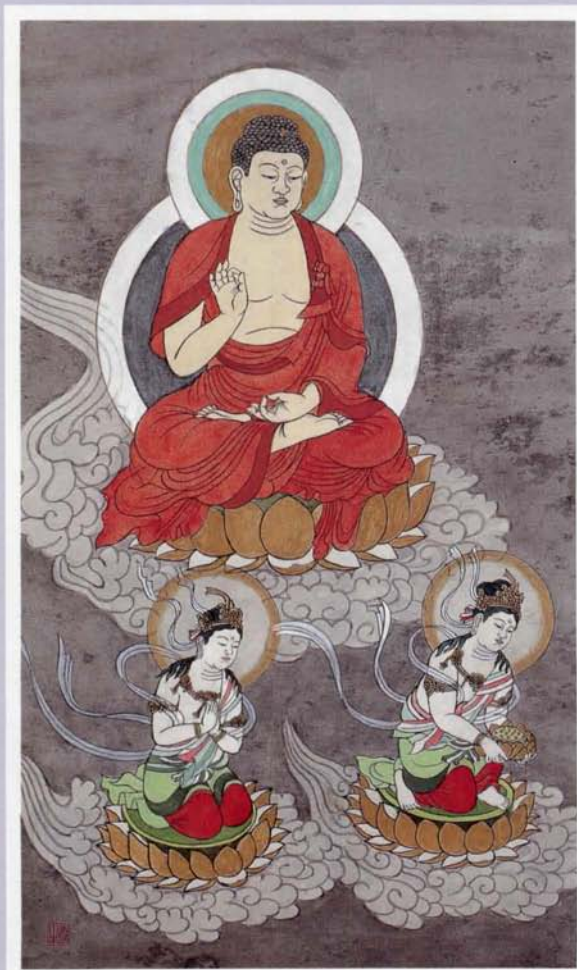
0088-82(無料)

または 0120-0088-82

●受付時間 9:00～23:00(年中無休)

遊行期

大島泰生(泰雄)の仏画





不動明王





カナカバツサ

大島泰生（泰雄）氏は、作家武田泰淳氏の実兄にあたる方で、ながらく東大の水産学の教授をおつとめになりました。晩年、まったくの趣味で描かれた仏画ですが、絵に門外漢であった氏の、この巻頭連載の、精魂をこめて一筆一筆描かれた魂の仏画ともいえる作品に、定年後の自由な心境を、もうひとつの人生の輝きを、見ていただければ幸いです。奥様の淑様は今年出版された作品集になかに、こう書いておられます。

老後の楽しみに絵を描きはじめました。が、佛画を描く時は、それなりの緊張感が、あつたと思います。その合間に、色紙や小品等を、描いておりました。日本画の絵の具の顔彩を、まぜ合わせて色を作るのが好きでした。

（淑）

浄土

じょうど



1995/11月号 目次

カラーグラビア遊行期	仏画=大島泰生	3
人間の性(さが)	大本山増上寺法主藤堂恭俊台下	8
若者の心模様どんな模様かいますか?	江口法子	14
智は限りあり、愚は限りなし	日下部匡信	22
魅せられて映画に	丸林久信	30
外国で生活して	中村良観	38
コラム		47
表紙は語る共に生きる	御所野洋幸	48
白球を追って	小川有順	52
浄土宗と卓球界	佐藤行信	56
Jフォーラム		63
事務局便り		68
編集後記		70

表紙題字=浄土門主 中村康隆親下

表紙撮影=御所野洋幸

アートディレクション=近藤十四郎

巻頭連載

人間の性

(さが)

——法然上人の心を探る(2)——

大本山増上寺法主

藤堂恭俊
台 下

四月二日から始まる大本山増上寺の御忌大会ぎよきだいえ（浄土宗祖法然上人の遺徳を敬慕讃歎し、その忌日に行う法会）は、一山を包むように桜花が咲きそろい、春霞のただようただ中に始まり、風に誘われて桜花の散りはじめる七日に終る。桜の木はひと時も休むことなく、まことに早い速度でみるみる内に若葉、青葉に衣更えをする。蟬の鳴き声に明け暮れる晩夏ともなれば、今まで肩をよせあっていた一葉一葉が、黄いろく変色したり、虫に喰われたりして散りはじめ、日一日と日影を狭めてゆく。桜の落ち葉については半世紀以上、昔の思い出がある。

私が育った祖山（浄土宗総本山知恩院）下の小院で、秋の彼岸を迎える頃、竹箒で桜の落葉を幾度となく掃きながら、草をひきぬいた少年時代のことが、臉にうかんでくる。そのことは、幼いころ意気地なしの飽き性だ、と母親からよく言い聞かされていたこともあって、自発的に匡正しようと一念発起した試みの一つであった。汗を流しながら掃いても、掃いても汗の流れが止まらないよ

うに、次から次へと散つていく落葉には、正直いつて腹だちさえ催した。そのたびごとに、このようなことに怒り・腹だちしているのは、風と相撲をしているのと同じである。と自分自身に言い聞かせたことが、昨日のこのように甦つてくる。喜寿の歳を迎えても、これと同じことを経験する。原稿執筆中であるとか、称名念仏の最中に、雑念妄念が落ち葉のように襲ってくる。私はその時に法然上人と高野の明遍空阿弥陀仏との問答をおもいだす。

生死をはなれ浄土に往生する道は、南無阿弥陀仏とみ名をとなえるに如くなし、という法然上人の言葉を受けて、そのとおりであるが、念仏を申している最中に「心のちるをばいかがい候べき」と、明遍は問いかえす。上人は「源空もちからをよび候はず」と、素直にそのことはあなたと同じであると答える。しかし明遍は「さて、それをばいかがい候べき」と、さらに問いつめる。上人は「ちれども名を称すれば、仏願力に乗じて往生すべし、とこそ心えて候へ。ただ詮ずるところ、おほらかに念仏を申候が第一の事にて候也」と懇切に教え

ば、「これをうけ給はりにまいりつる」と、明遍は満足して立ち去った、という。

上人は後刻、

たとへば人界に生をうけたるもの、目鼻のあるがごとし。散心をすてて往生せんといはん事、そのことはりしかるべからず。散心ながら念仏申すものが往生すればこそ、めでたき本願にてはあれ。

と、門弟たちに語ったと、『黒谷上人語燈録』巻第五に伝えている。上人のいう「おほらか」とは、人間の性であるさが雑念妄念の相手をしないで、起らば起れと取りあわないことである。

落葉し始めても、桜の木が丸裸になるのにはほど遠いが、人間の営みとは異った、様が変わりの冬仕度を始めたことを告げる。木枯らしや霜、雪に無防備のまま、冬にたち向うすさまじい生命力、自然のなりわいに驚異のおもいが湧いてくる。

枯木のように丸裸になつての越冬は、凍え死にしないだろうか、という私たち人間の思慮分別からすると、まるで捨身のわざとしか思えない。我田引水と嘲笑されるかも知れないが、南無阿弥陀仏とみ名をとまえ、わが身とわが心のすべてを投げだし、阿弥陀仏はとけのお慈悲のふところに飛びこみ、すがり・まかせてすべてをゆだねる^{きみよう}帰命の心情に通じるおもいを禁じ得ない。桜の木は無防備になることによつて、大自然の恩恵に浴しつゝ春を待つように、念仏者は思慮分別をかなぐり捨てることによつて、在り阿弥陀仏のとわのみのちに生かされて生きる。

南無阿弥陀仏といふは、別したる事には思へからず。阿弥陀仏はとけ我をたすけ給へといふことばと心えて、心にはあみだほとけ、たすけ給へとおもひて、口には南無阿弥陀仏と唱えるを、三心具足の名号と申也。

と、法然上人は常に仰せられたという。

この「たすけ給へ」という切なる心情は、みずからを全面的に阿弥陀仏に投

げ捨て、すべてをゆだねる情態である。こざかしい人間の思慮分別・はからいは容易に捨てがたい。それは人間が生まれながら具えている人間の性^{さが}であるからである。その捨てがたい思慮分別・はからいは、南無阿弥陀仏とみ名をとなえれば、おのずから消え去ってゆく。捨て去ろうとする意志は自分自身の心のはたらきであつても、実際に捨て去ることのできるのは、南無阿弥陀仏の一声一声に加わる阿弥陀仏のおはたらきによる。このように南無阿弥陀仏とみ名をとなえることは、阿弥陀仏に向つて自分自身の空無化することである。自分自身を空無化することは、阿弥陀仏のふところの中に生まれかわることであり、利害損得に明け暮れ、名聞利養にうつつをぬかす世俗と異つた、阿弥陀仏の tow のみいのちに生きることである。

若者の心模様

どんな模様かいえますか？

江口法子

今年は年の始めから色々と、人を、心を騒がせるようなことがいつになく多い年である。それも若者がクローズアップされ、何やかやと取り沙汰されるようなことが続く。若者たち、それぞれの心模様はどんなものであろうか。さまざまな心の有り様があるだろう。

あの未曾有の被害を出した阪神大震災では、学生を含む若者の多くのボランティアが大活躍した。駆け付けた時と、ボランティアを終えた時とは、本人も思わなかったような心の変化、成長を遂げた若者が多かったことであろう。彼らにあなたの心模様は？ と尋ねるとはつきりと自信を持って、自分たちの心の変化を語ってくれるだろう。そうして、アメリカの大リーグで大活躍している野茂投手のような若者もいる。彼は新聞などで見ると、早くから自分のしたいこと、やろうとしていることをはつきり持ち、それを実現するべく努力してきたとのこと。それがみごと花開き今日がある。彼も、いつもはつきりと自分の有り様を、目指すところのことを語っている。

一方あの、おどましいサリン事件をきっかけに、続々と恐ろしい事実が判明し続けているオウム真理教のさまざま。無表情な、人間らしい反応を忘れてしまったような顔を持つ多くの若者たちがつきつきと新聞を、テレビを賑わし続けている。彼らには「私は」という形で自分を語ることはとても難しいだろう。

気にかかるのは、彼らに代表されるかもしれない多くの若者の心の有り様がどうなっ

いるのかということだろう。

「あなたの心模様は？」

どれだけがはっきり答えることが出来るだろうか。

僕は、私はこういう人間です、といえるだろうか。これは難しいことではある。おとなを自認している我々だって、一呼吸おかないと出てこないかもしれない。

私は誰？

「自分が」何だかおかしい」「自分でも自分のことか」わからなくて、もつとはっきりしたい」と心理相談機関を訪ねてくる若者が多くなってきた。自分を見つけよう、心の有り様を確認しようとする。確認したい、はっきりしたいと自分自身を見つけるために悩んでいる。

悩んでいる彼らの中には何だか分からないけれど、それらしいことを強く言ってくれる人なり、団体なりに頼りたくなつて引きずられていくこともあるだろう。どの人が正しいのか選択するのは難しい。とにかく強く、しっかりと引っ張ってくれる人を求めている。

自分の心の有り様を見つめる在り方を、小さい時からしてきた若者は少ないだろう。お

とながそういうふうには係わってこなかったから。

私たちが成長の過程で乗り越えていかねばならない心の発達課題がいくつもある。ともすればそれが、いつのまにやら周りのおとなによってねじ伏せられて、積残しのままて体だけ成長してしまうという状態が多くなっている。社会の多様化、複雑化によりおとなたちも考えるひまなく、子どもたちを追い立て、おとなになれる若者たちを作り出してしまっている。

「私はこういう人間です」と自分のことをはっきり告げられない若者たちが作り出されている。アイデンティティを確立せぬままの若者が、あちらこちらでふわふわと歩きまわる。確たる自分が自分で捉えられない辛さは、表現の仕様のないことだけに、苦しいことであろう。

悩まない若者たち

若者、本人が来るだけでなく、最近、自分の子どもをどう考えたいか、どうしたいかとか相談に見える母親たちの多いのに驚かされる。そこから見えてくる若者たちの有り様は「何だかおかしい」とも「もつと自分のことをはっきりさせたい」とも、まったく

思う事無く過ごしている姿でもある。本人はそのことを意識して苦痛に思っているわけでも、問題としているわけでも、困っているわけでもなさそうである。ただ、自分の有り様が不十分なために起こってくるトラブルには困っているのであるが……。

たとえば、こんな例がある。

年令35歳の男性エリート・サラリーマン。大学を優秀な成績で卒業し、挫折を味わったこともなく、難なく大企業に就職。しかし、学校時代から友人関係も少なく、ひとりてパソコンに向かうことが多かった。おとなしい性格から母親などはやりやすい、いい子との見方をしていた。息子が不自由なく勉学に励めるようにと、母親は身の回りの世話を焼き、欲しがるものは無理をしても与えていた。ところが……。異性の友達を求め、なんとか付き合いをしようと思うのであるが、なかなかうまく付き合えない。始めは順調にいくが、その内、彼女の行動をいちいちうるさく非難はじめ、彼女が反発すると激高する。彼女が去るとそれに落ち込み、母親に当たる。

そういう息子を見かねてなんとかしてやらねばと母親が相談にくるのである。

この男性は35歳ではあるが、成熟とは程遠い。未だ青年であり、若者といかない。対人関係も希薄で、挫折を体験することもなく、あまりに護られた環境で育った若者である。知的な面が優位にたち、葛藤に対する耐性のなさは想像に難くない。自分の振

る舞^がが自己中心^だとは考えてもいないし、ましてやそれが自分の心の有り様と関係あるとは思ってもいない。葛藤^がにならないのである。ただ、なんとはなしに何か、親とのことなどがあるのかなと感じてはいるのか、お前の育て方が悪いから、こうなつたと母親に当たりはしている。その問題を自分にぶつけ、抱え、悩むことが出来ない。

結果は、そういうふう^に育ててきた母親たちが右往左往して困り果てているのである。母親たちと話をしていると、毎日一緒に生活してきたはずのこどもたちのことがまるで見えていない。行動のパターンは承知している。それは小さい時から見知つたものであり、反応であるから、それを母親たちも全く変えようとせず^に今日まできている。小さい時はおとな^がさまさま^が手を貸して、世話をしなければいけないのは当然である。それが10歳になつても、20歳になつても続いている。

こどもの動き、反応を少し距離を置いて見ていると、前述の発達課題に従つて、少しずつ違つた反応、動きがあつたはずである。それに応じておとなも係わり方を少しずつ変えていくことで成長への歩みを進められるはずなのだけど……。

おとなの思うやりやすい、いい子であつてはしいから、反抗期^がくると押さえこもうとする。母親たちの押さえ込みが成功して、そのまま成長したこどもたちが「何^がか変^な」と何となく感じながら、でも、何^がどうだか分からないまま、そうして、何をどうしてい

いのか分からないまま過ごしている。結局は母親たちの注文どおりに育ち切れずに、ドロップ・アウト。何となく自分自身に居心地の悪さを感じながらも、それを自分自身のこととは考えず、外へ原因を求めようとする。親が悪いとか、上司が悪いとかetc.……。相手が悪いから自分が悪くなったと(幾分は当たっている)。20歳を過ぎても、30歳を過ぎてもなお、自分自身のことを自分で負いかねる。母親もこんなはずではなかったとこどもを責める。

心模様が語れるには

親と子との関係のなかで、さまざま積み重ねないと出来上がっていかないものが人間の成長なのである。それも丁寧な、心をこめて、繰り返し繰り返し、相手の反応、動きをみながら積み重ねていかねばならない。

心の成長ははっておいて成るものでもなく、一方的なものでもない。お互いの関係性の中で培われていくものであり、それがないと生きてはいけない。体は成長していても、心は成長しないまま。そういう体験を持たずに成長した若者が増えていく。丁寧に、自分のことを構ってもらったり、分かってもらったりした体験がないという。

社会は学歴偏重を始め、目に見えるもの、形あるもの、格好を付けることにばかり頑張ってきた。目に見えないもの、形として見えない心に係わるさまざまなものを疎かにしてきた。

そのために、いずれの形にしろ、自分のことで悩んでいる多くの若者たちがいる。そうして、なんとかしたいと思ってもいる。人間誰でも成長への指向性を持つ。なんとかしたい、なりたいたいと思ったときに、誰か応えてやるか、傍に誰かいるかである。正面から受けとめてやるおとなが居るか。そういうおとなに出会えた時に、初めて若者は自分の心模様をはつきりと捉え、語ることが出来るように思う。

(佛教大学臨床心理学研究センター・セラピスト)

特別寄稿

法然上人と私

法爾

智は限りあり、
愚は限りなし

日下部匡信

私は、求道の末に法然上人の教えに出会ったわけではありません。こちらが要求する前に与えられたものは、有難みもなく、本当に使えないなどといわれますが、ご先祖さまから代々うけつがれてきた信仰はそれを超えて尊いものです。浄土宗寺院に生まれ育ち、今に至るまですべてが法然上人の教えの中にあつたのですが、そのことに気付きはじめたのは、大学を出て住職になつてからのことです。恥ずかしいことです。さらにここ数年、法然上人の教えのいただき方が、自分の経験をものさしにした独り善がりのものであつたことを反省させられています。理論や理屈は自分の頭で作るものです。これから書くことも、理屈の世界を出ることができないかもしれませんが、智は限りあり、愚は限りなしの視点で、法然上人の教えのいただき方を、諸

氏のことばをおかりしながら考えてみたいと思います。

●あたりまえのことを言う名人

大学生の頃、心を動かされたのは『上人つねに仰られる御詞』にある「法爾の道理ほうに」という御法語でした。

法爾の道理といふ事あり。ほのをはそらのぼり、水はくたりさまにながる。菓子
のなかに、すぎ物ありあまき物あり。これ
らはみな法爾の道理なり。阿弥陀佛の本願
は、名号をもて罪惡の衆生をみちびかんと
ちかひ給たれば、ただ一向に念佛だにも申
せば、佛の來迎は法爾の道理にてうたかひ
なし

私には、あたりまえ、無理がない、自然体
というもののあこがれがありました。法然

という名も『勅修御伝』によれば「幼稚のむかしより成人のいまに至るまで、父の遺言わすれがたくしてとこしなへに隠遁の心ふかきよしをのべ給に、少年にしてはやく出離の心をおこせり、まことにこれ法然道理のひじりなりと隨喜して、法然房と号し、云々……」

とありますし、明治から昭和期の小説家中里介山は、その著『法然』で「入信の動機より出家の経路、煩悶より得道、一宗一門開創に至るまで、その名の如く全く法爾自然で、無理といふものは少しもない、彼は天成の平民的求道者であり、宗教的偉人である。」と法然上人をたたえています。本音と建て前に分けるならば、無理なく本音の立場にある法然上人です。

私たちは生活の中で、あたりまえのことを言うのに勇気があることを経験しますし、又、

あたりまえのことが、ある種の力になることも知っています。しかし、法然上人の「法爾の道理」の御法語をいただくときに、世間の原理であたりまえをとらえてはいけないうです。人間が、どんな悲惨な状況になっても、必ず阿弥陀佛の慈悲がそれを上回っている、という絶対的な事実を受けとめた上で、のあたりまえなのです。相対的な世界に生きている私たちは「便利は暇を生むと同時に、その暇を食潰すものをも生む」（評論家福田恆存）ということばに頷けます。もう少し引用しましょう。

私達が自分にとって損になるものを切捨てるときは、必ずそれに伴ふ得になるものも一緒に切捨てることになり、その反対に、何か得になるものを入手するときには、必ずそれと抱合せに損になるものと一緒に背

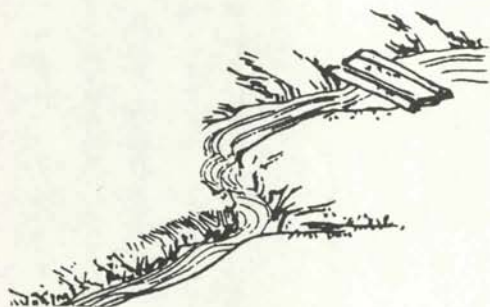
負ひこむことになる。損だけを捨て、得だけを貰ふといふわけにはゆかない。それは取引の原理である以上に、附合ひの原理である。なぜなら取引の場合には、差引勘定が出来る。が、附合ひの場合には、それが出来ないからである。(福田恆存)

日常はこの通りです。しかし、念佛を称えることによって往生を得という、阿弥陀佛の方で先手で用意されている事実は、日常の事実とは異なった絶対的、超越的な事実なのです。法然上人はこの事実に基づいて「佛の来迎は法爾の道理にてうたがひなし」と、念佛をすすめるのです。

亡父の新聞切り抜き帳で、評論家の亀井勝一郎が「あたりまえのことを言う名人」として法然上人をあげている記事を見つけました。彼は、『徒然草』に出てくる「念佛のとき、睡

におかされて、行を怠ることがあるが、この障をどうしたら止めることができるだろうか」との質問に、法然上人が「目のさめたらんほど、念佛したまへ」と答えた話を紹介して、「実にあたりまえの答えである。ねむりにおそわれたら眠るのが自然だ。目がさめてから念佛すればいい。あたりまえすぎることで、そこにはどんな無理も誇張もない。兼好法師は、「いと尊ふとかりけり」と感心している。」「いい、「酒のむは罪にて候か」という質問に對する「まことには、のむべくもなければ、この世のならひ」という法然上人の答えを、なんとも味わいふかい答え、微妙な「いたわり」の情がこもっていると評し、最後に、

世の中があげて突飛で変ったことを競っているとき、平然として、ずばりと、あたりまえのことを言う人こそ真の智者である



う。

とまとめています。日常生活のものさして「あたりまえのことを言う名人」はいくらもいるでしょう。法然上人は、凡夫のはからいを超えた阿弥陀佛の本願成就（念佛往生）の事実を説いて下さる名人なのです。自分の都合にあわせた「あたりまえ」「おかげさま」は誰でもうけとることができます。自分の知識経験すべてを用いてもどうにもならない苦しみを持つ私に、阿弥陀佛の救いにまかせる道を説いて下さる真の智者が法然上人です。

●こなたはまず自分の頭を
下げなければなるまい

「失敗のすべては他人のせいにしる」という教訓を母乳代わりに飲んで育つ若者がふえている、といわれます。「佛さまがごらんになっ

ていらつしやるから、いじめられても、叩かれても、決して他人を口汚く罵ってはいけな
いよ」という教育と格段の差です。自分を
変えずに、他人を変えることばかり願って
いて、幸せはありません。人生で出会うことは、そ
れが気に入らないからといって、事実を打ち
消すことはできません。自分の荷物は、あき
らかに見きわめて、覚悟を決めて背負わな
ければなりません。人間の知性、理性をゆがめ
る執着や煩惱に目を向けるのが法然上人の教
えの基です。人間の知性、理性を一番とする
立場から仏教は成り立たないのです。『一枚起
請文』の「愚鈍の身になして」「智者のふるま
いをせずして」とはこのことです。

教えを大事にしましょう。教えを大事
にさせてもらうたうら有難いで。凡夫はのう、
教えより自分の考えの方を大事にするから

のう。(ある念佛者のことば)

現代化などというながら、法然上人の教え
を自分流に解釈する思い上がり^がを反省せねば
なりません。智は限りあり、愚は限りなしで
す。人は皆、幸せを願います。しかし、幸せ
を願う心よりも、俺が俺^がという自分中心の
心の方が強いのがこの私です。ああしてこう
すればうまくいくと頭で承知していても、自
分中心の心^が前に出てしまします。

世の中は一つかなえはまた二つ

三つ四つ五つ六つかしの世や

果てしなき欲の重荷をせおいつつ

あえぎあえぎて世を渡るかな

我欲でいっぱいのは私の私です。無理に求めた幸福
は消えていきます。幸せを得て安心していて
も次の欲望、悩み^が出てきます。「人生にはハ
ッピーエンド^がないからなあ」とおっしゃっ

た人があります。小説や物語のようにはいかないのが人生です。ハッピーエンドのないまま、生老病死するまま、この身このまま救われる教えを大事にせねばなりません。知識教養をつむだけで本当の心の安らぎはえられません。まず自分の頭を下げることです。

山本周五郎の小説『武家草鞋』で、主人公宗方伝三郎に老人が語ります。

「こなたは世間を汚らわしい卑賤なものだと云われる、しかし世間というものはこなた自身から始るのだ、世間がもし汚らわしく卑賤なものなら、その責任の一半はすなわち宗方どのにもある、世間というものが人間の集りである以上、おのれの責任でないと云える人間は一人もない筈だ、世間の卑賤を挙げるまえに、こなたはまず自分の頭を下げなければなるまい、すべてはそこ

から始るのだ」

「廉直、正真は人に求めるものではない」

世の中の真実です。まして、極重悪人、無他方便の凡夫が、阿弥陀佛のみ力で救われるという法然上人の念佛の教えに向かうとき、私のはからいを捨て、教えを大事に、自分の頭を下げなければならぬことをつくづく思っています。某師がおっしゃいました。

自分の立場を固定して、自分の受けとれる法然上人の教えを選んでいないか。思いあがっている。法然上人の教えて、自分が崩壊するところから始まるべきだ。

表現はきびしいですが、佛法のうけとり方の基本だと思えます。他人のことじゃない。

法然上人の教えを、私がいたたくのです。



法然上人鑽仰会から与えられた「法然上人

と私」というテーマにそうことができたてし

ようか。借り物のことばばかりですが最近考

えることを記しました。

最後に好きな詩を二つ。

雨

野村康次郎

雨は

うんこの上にもおちなければなりません

いやだといっても

ダメなのです

だれも

かわってくれないのです

榎本栄一

しぶといこの頭が下がったら

お浄土の光りはこんなところに

☆清水 澄先生の論文「現代と法然上人の教

え」(『法然上人の伝記と思想』隆文館)との

出会いを喜んでおります。

(長崎・長徳寺住職)

連載

魅せられて映画に〈私流映画講座Ⅰ〉

丸林久信

発想

イメージ

映像

8



1



9



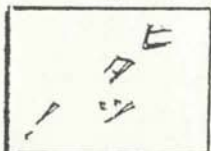
2



10



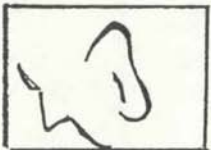
3



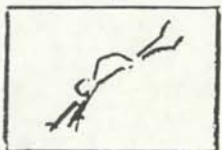
11



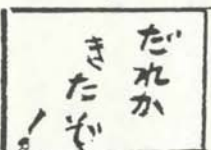
4



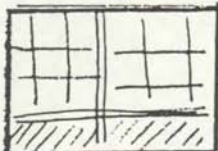
12



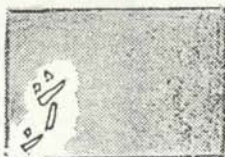
5



13



6



14



7

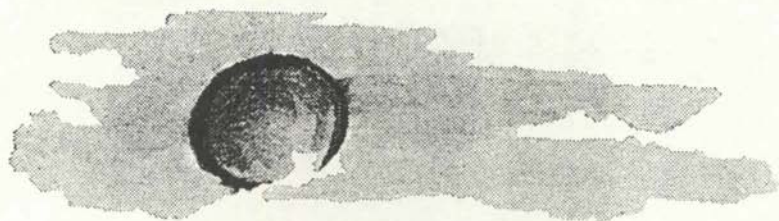


古池や蛙飛びこむ水をと

俳聖芭蕉の句です。中学生の男の子に

「きみはこの俳句で絵を描くとしたら、どんな絵を描く?」

「絵を?」彼は興味をもったらしく、じつと俳句をみつめていたが、やがて大きくうなずくと、あつというまに次のような絵を描きあげたのでした。



古池や

蛙
とびこむ

水の音

おなじ質問を、俳句をよくする友人にぶつけてみました。彼は、色紙にさらさらつと描きあげてみせてくれました。朧月が左上方に描かれて、その下の余白に俳句を書いたのです。

まず、男の子の発想ですが、彼は、この句を、なぜ、こうした絵のコマの積み重ねに置き換えたのでしょうか。彼の頭の中にはただ単に絵があるのではなく、動きがあったのです。そして、その動きとともに一連の流れがひろがります。彼は文章を読むのではなく、見ていたのです。視覚による感覚で文章を読んだといえましょう。彼はコンテ（監督が撮影台本に、一カットずつ具体的にスケッチ風に描いたもの。カット割、アングル、俳優の動きなどこまかく指示した演出用台本）で、絵コンテふうの絵からつぎつぎと物語りをくりあげていくのでした。

蛙が鳴きやんだ。誰か来たッ！ 伊賀者の芭蕉は全神経を耳にあつめた。機先を制し討って出ようとして障子を開けた。男が逃げ、

池の蛙が「ヨカッタネ」と微笑った。「蛙クン、ありがとうよ」と芭蕉も微笑った。蛙は安心して池にとびこんだ。ポチャン、静かな平和のときが戻った。

「きつと、刺客の奴、顔をみられちゃまずいんで、あわてて逃げたんだ。あいつ、芭蕉と仲良しの俳句の友だちか弟子だったんだぜ」

男の子は唇を噛みしめると、腹立たしげに「あいつ、裏切ったんだ。大人って嫌だなあ」といったのでした。私はこの言葉に驚かされました。「大人って嫌だ」という言葉の裏にかくされたもの、私たちが日常なにかしらこころの底で考えていたようなことを、ちゃんあと見抜いていたのです。

大人の世界への批判が、男の子のテーマになつていたので。さて、友人の絵ですが、彼はこの句のなかの寂びと侘びの世界を具象化したわけですね。深川の草庵の春の昼下りに詠んだ句が、ここでは夜になっています。蛙のとびこんだ水の波紋は見えなくても、こころ

の波紋は静かな輪を描いていくのです。空間にひろがる無限のひろさを感じとれます。

混濁した世相のなかで、こうした心境を析うところがわかります。だが、私は、どちらかといえば、男の子の発想に、これこそ映画だ、映像だというものがあるように思えるのです。

そこで、私の想像の翅が……。芭蕉がもし伊賀者だとしたら。(誰が、なんのために刺客を差しむけたか。俳諧師としての彼の弟子は諸国諸大名、富豪、寺社関係者が多いから『野ざらし紀行』『奥の細道紀行』『伊勢紀行』など日本国中、吟行に名を借りて往来が出来たのではないか。隠密の家に産れて世襲の重みや悩みがあったのでは。彼の隠密行の目的は？……などなど) どんどんと話が、画がひろがつていくのです。芭蕉、隠密なりせば。ひとりよがりの推理かも知れませんが、私たち映像を創る者にとっては、まず、芭蕉かなぜ日本中を歩けたのか、あの厳重な警戒を布いている関所を通れたのか。

なぜ、なんのために。疑問は発想の源ではないでしょうか。そして、テーマをみつけ、

《想像》から創造にと発展します。

AとBが、ばったりと顔を合わせました。

知人であっても、そうでなくてもよいのですが、このふたりのめぐりあいが、悲劇喜劇の人生模様のドラマをくりひろげるのです。

友人のパーティに紹^よばれて知りあった。約束の待ち合せの時刻に遅れたばかりに、おなじ遅れた者同士が結ばれた。交通事故で加害者と被害者のあいだに恋が芽生えた。偶然、殺人現場を目撃したばかりに、殺人者Aに追われるB、生さぬ仲のAとBの確執^{かくしつ}（もめごと）による事件……etc.

閑さや岩にしみ入蟬^{いるせう}の声

（芭蕉）

一家に遊女もねたり萩と月

（竹）

どこへ仕事もとめて峠の風にうづくもる

（二石路）

うしろすがたのしぐれてゆくか（山頭花）

こうした句から、時代劇、現代劇に置きか

えたストーリー（物語、筋）を考え、それをさらに発展させ、絵コンテふうに組み立ててみたりといったような、映像あそびをやってみませんか。いちどやってみるとけっこう映像作家（シナリオ・ライター、演出家、俳優プロデューサー）の気分が味われると思います。五・七・五、たった十七文字のなかや、ちよつとした出あいから、ながいながい作品が出来あがるのです。

発想・イメージ、そして、頭の中で映像をつくっていくのです。頭のなかの映像はスクリーンに写しだされる映画、テレビのブラウン管に流れる映像のように動きだします。あなたのつくった登場人物はひとつの人格を形成して、ドラマの世界で生活をし、息づかいをしています。そうした人物の会話や行動のなかから、テーマがみえてきます。いきおい、ドラマは活気づいていきます。「面白い！」と思うったら、こんどは、角度、視点を変えて考えてみるのです。AとB、芭蕉と刺客、そ

それぞれの立場に立ってみると、ドラマはまた別の面白さをみせてくれます。

当時、助監督だった私に、マキノ雅弘監督が言われました。

「脚本は頭（フアースト・シーン）から書いて、次には終り（ラスト・シーン）から頭に向って書くんだ。そうすると、いろいろな矛盾、ぜったいこうはならない、そんな発見をするよ」

仰（お）しやられたとおり、はじめはしっかり構成した筈が、筆にまかせて、いつのまにか都合よくことを運んでいたことに気づきます。

黒澤組「生きる」の助監督についていたと
きのことです。或るシーンの撮影にとりかかる寸前、黒沢監督が

「マルツ！ 堀川（堀川弘道監督） ツ！ デ
コスケッ！ ちょっと来い!!」

ふた리를呼びつけました。「さア、雷が落ちるぞ！」スタッフの目が私たちに注がれます。私も堀川君も嫌な予感で、監督のあとについ

てスタッフ・ルームに行きました。

机をはさんで腰かける三人。不意に、監督が、私たちの目の前に台本をひろげて、どんと机を叩きました。

「おい、どうするツ!」

監督は、このシーン（場面）の設定とセリフが気にいらないうです。

それッ！ というわけで、三人は原稿用紙に向い、同時にそれぞれでそのシーンを書き直すのです。スタッフ・ルームは、まるで真剣勝負の場のような気魄が漂い、誰も入って来れない雰囲気になります。

書きあがって、ディスカッション（討議）
……。

「よし、これでいこう」黒澤監督が決断します。

——ああ、この監督、ひとの使い方うまいなア。

と、つくづく思いました。

人知を集めて、充実した仕事を成しとげる。これは黒沢さんならではの出来ないことだと思

います。イメージが湧いても、いざ撮影に入
ってみたら、監督の思いどおりにならないこ
ともあります。俳優が動いてみたら、コンテ
どおりには、語ることも動くことも出来ない、
また、俳優の肉体的条件がセット（舞台装
置）、天候の条件に左右され、ニッチもサッチ
もいなくなるときがあります。

私と堀川君が呼びつけられたのはこんなと
きです。

「人間に万全はあり得ない」これは常識だが、
黒さんは執拗なまでに万全を求める。妥協す
る弱さを頑なに拒否し、もがいているのかも
知れない。仕事に対して、その場を上手にす
りぬけて対処する人々をみると、黒さんは
そこに自分の在りようをみつける。そして、
その弱さが鏡のように自分に返ってくる。

「人間は元来弱いものだ、だからといって諦
めていいのか。黒さんは自分の弱さに打ち克
とうと頑張るのです。私はそんな黒さんが好
きでした。」

「生きものの語録」太陽の大きさと赤さの色
が気にいらぬ。なんどオープン（野外セッ
ト。屋外）で待機したことか。これはいかな
天下の黒沢監督でも自由に出来ない。「なあ
に、いまに向こうさまが合わせてきてくれ
る」どこまでも押しの強い黒さんである。絶
対に参ったとは言わない。四つに取り組むの
です。

「監督からどん欲を除いたらなにが残る」

黒さんのこの言葉はいまだに私の心の奥の
方に焼きついている。

当たり前のことが当たり前でなくなってい
るこのごろ、余計に生き生きと私を鞭うって
くれる言葉でした。

発想から頭の中で描き写す映像、あなたも
粘りに粘って、イメージの世界に遊んで下さ
い。そして、面白さが判ったところで、ぜひ
いままで以上に、映像づくりへの関心をたか
めていただきたいと思います。

（元東宝映画監督）

注1 テーマ

主題。①作者のモチーフ(動機)から生れた作者の人生観・社会観・人間性のつかみ方のあらわれ。作者が、その作品をとおして、何をいわんとしているかの何にあたる部分。②テーマ・ソング(主題歌)、テーマ・ミュージック(主題曲)

——参考文献——拙著『映画製作ハンドブック』黎明書房
『黒沢明ドキュメント』キネマ旬報社

○「見る」から「創る」に

○発想・イメージ・映像

○人間の眼・カメラの眼

○走れメロメロ・助監督物語

○生きるも死ぬも

○変なひとたち・撮影所ごぼれ話

○誰かがどこかで シナリオ・その一

○男と女・女と男 シナリオ・その二

連載

外国で
生活して
④

お念仏に生かされる

中村良観

ハワイ浄土宗
前開教総監

HAWAII

「世界人類の歴史は一頁に収まるが、個々人の歴史は数万頁を以てしても書き足りない」と言うのは、有名な歴史学者H G ウェルズの言葉であるが、戦後五十年の節目の年に当って、あれこれの回想がマスメディアをにぎわしている時、四十年に及ぶハワイでの開教生活を取り返って、ごく断片的な想出を綴って見たい。

旅順で海軍予備学生の訓練を了えて、九州の特攻隊基地に派遣されながら、不思議に命を長らえて、終戦後いち早く仏教専門学校に復学を果たし、卒業後自分なりの青春の想いを学究の生活にぶつけて名古屋大学に在学中、大倉山文化科学研究所のゼミナールに招かれた。特請の講師は極東軍事裁判の主席判事をつとめたインドのパール博士。戦勝国が敗者を裁くのは国際法上不当であると主張しながら、「恨みはうらみに依って静まることはいない。うらみなき心によってのみ……」と言う法句經のコトバを引用して、公正な戦争責任

の問い方と佛教者の生き方について、一週間を亘って熱っぽく語ってくれた時、眼から鱗の落ちる想いにかられた。因みにパール博士は英国で国際仏教研究所を主宰し、戦後早く「佛教の十二原理」を公表して、世界に向けて佛教の基本的な理解を訴えていた法学者クリスマス・ハンフリイズ博士の高弟であった。パール博士の主張と信念に激発され、平和への生きざまを模索していた時、偶々一九五二年の秋、「戦争の反省と佛教徒の責任」をテーマに開かれたのが、第二回世界佛教徒会議であった。名大佛青を代表して始めての国際会議に参加し、東京、名古屋、京都の各会場や分科会で知遇を得た「行動派」の指導者たちに魅せられて、海外への脱出を企てる事になった。

佛陀の国インドへの留学を志しながら、経済事情の故に決断を遅らせていた筆者は、丁度その年にハワイ巡教を了えて帰国されたばかりの故国の大先輩、師表と仰ぐ椎尾匡先

生の奨めで、念佛具通のためにハワイへの転出を果たすことになった。

「時は今、ところ足許その事に　うち込むいのち　永遠の御いのち」の色紙を頂き、「海外に出て先ず学ぶことです」と激励されて横浜を出港したのが一九五四年六月、七日半の船旅を了えて入港したホノルルは、折しも六月十一日、カメハメア大王祭の祝日であった。アロハ塔にふりそぐ陽光はまぶしく、アラモアナに打ち寄せる白波は紺碧の大洋に連なり、ハワイ大学を懐にしてマノア谷にかかる虹も、カラカウア大通りに咲き競うポインシアナの街路樹も、総てが清新の気に満ちていた。

その太陽は今も変わらず、万象の上にも左程の変移は認められないが、昨年開教百年を迎えたハワイに住む人々の心には、隔世の違和感があり、その生活様式にも格段の相違が見られる。「東西哲学者会議」を主催して来たハワイ大学に一年学んだのち、ハワイ島の僻地に赴任を命ぜられたのを機に、現地に骨を埋

める覚悟で、真珠湾攻撃の日父と兄を失った日系三世の娘を伴侶に選び娶ったものの、贈るべき指輪を購入する貯えのあろう筈もなく、任地の山寺では数カ月の間収入もなかった。来る日も来る日も買い置き味の喰をなめ、野生のグワバをもぎバナナをあさって食いつなぎながら、開教したばかりの日本語学校に児童を集める為に、連日連夜サトウ蔗耕地を駆け廻る日が続いた。

その頃泌々と味い知ったのは初期移民労働者の忍従と苦闘の歴史であった。入植当初の日本人にとってハワイは樂園ではなかった。言葉も通ぜず、風俗・習慣も宗教も異なる諸民族が一つの耕地にひしめき合い、娯楽も慰安も求めようのない生活環境の中にあつて、人間の求めるものは何であろうか？ 奴隷に等しい過酷な労働条件の許で、風紀は紊乱し、飲酒・賭博・刃傷沙汰が頻発し、三万人にのぼる日本人渡来者が極端な精神的危機に陥っていた時、一八九四年の春、満蒙の広

野では日露の戦火が砲煙を交えていた頃、四尺に余る佛像を背負い、馬の背を唯一の交通手段として、星の光を頼りに数十哩に跨る耕地を駆けつり廻った熱血漢岡部開教使の逸話などを肌で感じながら、人間生活の限界ぎりぎりの所で、念仏信仰の果たした役割の重さを見直さずにはおられなかった。

やがて生れた長女をチャンドラ（月光）と名づけ、ダンボール箱に入れて教室の片隅みに寝かせながらの二部授業、毎日夜道に車を走らせて十指に余るキャンブ説教に、幻灯機や紙芝居などを用意して各戸五〇仙の法謝、二十マイルに散在する農家から子供達を拾い集めて集会場で開いて来た日曜学校、やっとの想いで再組織させてもらった地域の青年団やボーイ・スカウト、やせる想いでこぎつけたジュニヤとシニヤの仏教青年会、そうしたものが動くまでには石の上の三年。赴任早々に竹林を拂って飢えた果樹は五年して実を結んだが、妻と共に流した汗と涙の種が芽生て

育つまでには十五年の歳月を要した。

ブナ地方に在職九年、一九六三年のチリ津波の後、乞われてヒロ明照院に転任、隣接するヒロ大学にキャンパス・ミニスターとして奉仕、仏教学生センターを開設、幼稚園の経営に乗り出した頃、収穫の秋を迎えることになった。曾ての教え子達の入信、入檀、結婚の式から就職の幹旋、事業への助言、人事相談などの激増に促されて結成したのが、インターフェイス・カウンセリング協会、これにはカソリック、キリスト教、ユダヤ教などの聖職者と心理学者・医師・看護婦・ソーシャルワーカーなどの参加と協力によって、自殺防止・アルコール匡正、精神衛生などのプログラムを展開して、多忙を極めながらも多くの事を学び得た。深夜の酒場に急行して酔っぱらいを看護したり、未明の一刻を自殺未遂者の部屋で過しては、人間の悲哀を想い知らされたりした上に、癌の告知、臨死の立合い、臨終行儀などを通じて、業縁とも言うべき人

間性のすさまじさ、生命の重さと脆さの両面をいやと云う程見せつけられ、又自ら深く見做め直す事が出来た事は感謝に堪えない。よく他人の悲しみが解らなくては宗教家にはなれない……と言われるが、まことに赤裸々な人間性といのちとのぎりぎりの対決なしには、宗教は語れないからである。

◆社会との連りから

一九八三年の秋、ハワイ浄土宗の開教総監に選出されて、ホノルルへ移住するに当って、ハワイ郡政府や令参事会を始め日系人協会、ライオンズ、ボーイスカウト、精神衛生協会、移民資料館等々、苦業を頒ち合って来た幾つかの団体から表彰、感謝、送別礼を受けるに及んで、蟹は甲羅に合わせて穴を選ぶ事に想い至り、円頂ながらも後ろ髪を引かれる事頻りであった。ブナ時代から始めて、二十年のヒロ在任中、二つの局から毎週送り続けたラジオの「修養講座」と「宗教講話」もいつし

か二、五〇〇回を数え、この人口三万足らずの三日月の町が、二人の娘にとっては言わずもがな、家内にも私自身にも第二の故郷になっていた事に気づかされた。

何処を歩いても知らぬ人のない小じんまりとした町のたたずまい。高校・大学への愛着、毎週足繁く訪問した記念病院での想出、信頼に結ばれた二百に余る檀信徒の家族、キャンブやプロジェクトを共にした4H・FAA・YBAなどの若者たちの笑顔、幼稚園や日校で馴染んだ子供たちの円らかな眼……どれ一つも離れ難いものであった。それらは速さと効率を追い求め、物質的な繁栄を強調して変貌するホノルルでは味わえない緩慢で素朴な暖かさに満ちていた。急き立てる様な時代の流れの中で、見失いかけていた心の落ち着きと人間への信頼をとり戻させ、感謝と充足とを与えてくるれ「人間らしい生活」がそこには残されていた。ホノルルの会議を終えて島に変えると、ほっとしてよく眠れたものである。

ヒロの町では、偶々食堂に座っても、こちらの気づかない裡に、私を見かけた誰彼れがそつと代金を支払ってくれると言う事も屢々であつたし、「いかがですか」と声をかけながら病室をすり抜けて行くと、知らない患者に呼び止められて話しこんだり、外人から祈りを頼まれたりは常のことであつた。ベトナム、フィリピン、中国、韓国人やユダヤ系などの交際を通して、年に一度のバザアーには、思いもかけない人種の協力が得られたし、日本から訪ねて来た初対面の学生の保証人を引きうけて、カソリック系高校の父兄会で神父と隣り合わせたり、自坊で行う結婚式に基督教の牧師を呼んで祝禱をまかせたり、他宗教の聖堂に招かれて葬儀を司つたり……こうした想出を残すことが出来たのも、清貧に甘んじながら無報酬で続けたラジオ放送のお蔭か、市内の酒場や集会場に貼り出した「人事相談緊急電話」の効果であつたかも知れない。

◆国境を越えて結ぶ信と友情

ハワイ島ハマクア沿岸にラウバホエホエと呼ばれる景勝の地がある。そこは曾て初期日本人移民の上陸港とて、浄土宗第二番目の寺院が建てられ、教務所の置かれた事もあつたが、一九四六年の津波で小学校と村落が潰滅し、その後うちよせる耕地過疎化の波にさらされて荒廃に類していた。無住のまま耕地会社から土地の返還を迫られていた時点で小納に特命が下つた。ラジオ法話でこの事にふれたところ、旬日ならずしてオアフ島から十数名の奉仕団がかけつけてくれた。何とそれは回教の一派ニューエイジ・スウフィのグループであつた。リーダーのヤクザン・ベルデシユはアルゼンチン生れの哲学者で池ノ坊華道の師範で、同行の信者は三組のカップルを含む男女十六名に幼児が二名。国籍も雑多な異教徒の信者が、他島から寝具や炊事器具までを空輸して来島するや、浄土院の庭と近くの

空地にキャンプを設営して、即日仕事にとりかかってくれた。

生い茂った巨木の枝をおろし、石垣を積み直し、屋根の張り替えから天井と床板の修繕にとりこんで疲れも見せなかった。メンバーの職業は大学教授に弁護士、商店主にダンサー等、経歴も教養もまちまちであったが、大工経験者の指揮の下に、慣れぬ手にハンマーを握り機械鋸チェンソーを操作し、藪蚊にくわれながらの炊き出しなど、埃まみれの顔に目ばかりが生き生きと輝いていた。一日の労働の終りには円陣を組み手をつないで敬虔な祈りを捧げて夕餉を楽しみ、座談に花を咲かせてから互いを祝福してテントで寝に就いた。

バランティヤの原点とも言うべき二週間余の奉仕を終えた月に、何とか寺らしく生まれ変わった佛前でユニバーサル礼拝を持った。旅費と雑費を捻出する為に、私物を出し合って車庫ガレージセールまで催し、異教の荒寺復旧に汗が流した人々の顔には、安堵の想いと満足感が

みなぎり、「浄仏国土」への参加を果たした喜びと誇りに輝いていた。

半月に余る日々起居を共にした私の腰は痛み、手はささくれ立っていたが、イスラーム・ユダヤ・ヒンズウ・仏教各派の独自の祈りを綜合したこの聖集に、手をつなぎ肩を組みながら、各国語による礼拝を繰り返して、夜の更けるのも忘れていた。中東アラブ系特有のむせぶ様な音律に合わせた円陣の舞と念佛合唱の響き、それにも増して弥陀本尊の御姿をふり仰ぐ彼らの目の色の涼しさ……伝統にも形態にも捉われない自由で率直な宗教的熱情が私の心をゆさぶり、魂の底までずしりと響いて、二十年後の今も尚燃えつつけいる。

これと前後してチベット佛教がハワイ島進出を企てながら行き詰っていた時、パハラの旧日蓮宗寺院を貰い上げ、シンゴン・ラムバの献堂式までこぎつける上に、私なりの協力が出来たのもこうしたスウフィとの体験を通しての事であった。お蔭でダライラマ十四世

猊下の知遇を得て、インドはタラムサラの宮殿に招かれ、その後も日、米、ハワイ各地で数度に亘って接見の機会を与えられ、色紙の揮毫や記念品を頂いたのも、佛縁の不思議と云うの外はない。

佛縁と言えば、先年タイ国王六十才の誕生宴に、ハワイ仏教徒を代表して王宮に招かれて接見の座に連り、王室の寺エメラルド寺院の特別法要に参加したり、ロス、バンコック、コロンボ、東京の各地で、中国仏教界の指導者趙撲初先生などと佛教を論じ、度々食卓を共にして語り合えた事も、更にはベトナム難民たちとの心あたたまるふれ合いと、今に変わらぬ友情の絆など、すべての出会いが佛縁の業成としか考えられない。

一九八三年開教総監に就任と同時に開設した浄土教センターでは、浄舟、浄道、浄信、浄蓮など白人、黒人、中国尼僧との出合を機に、故藤井御門主猊下の御指南を得て子弟として僧籍に登録し、念佛の同行として今日ま

で研鑽にはげんでいる。妻浪江の葬式の直後訪ねて来たボストンの医師アンドリュ・マイヤーの場合、その道心堅固と見込んで別院に留め、一ヶ月修練の後浄安の法名を与えて、ボストンにささやかながら浄土院を開創。当初のアプルトン街から南ボストンの現在地に移った後も、毎年続けて研修別時会に出講し、現地信者白人、中国人十数名の帰敬式を行って来たが、一昨年の秋法縁の機熟して浄安を日本に招いたところ、一ヶ月余の特訓に堪えて、彼は今清貧に甘んじ病苦にもめげず、勇猛精進・忍終不悔の願行に励んでいる。

◆結び

ホノルルでの四期八ヶ年の別院生活は別の機会に述べる事とするが、人手不足で多忙を極めた寺務の外に、ハワイ仏教連盟・仏教伝道協会スタータ委員会の行事や会議、毎週いくつかの病院慰問、養老院の出張説教、ラジオ放送、テレビ局への協力、超宗派サマリタン・カウンセリングの実務、ボイスカウト連盟、精神衛生協会、家族計画委、上下両院での祝禱、加えて日系諸団体の様々な集いに参加するなど……その生活は家族との団欒^{だんらん}など顧みる暇もない慌しいものであったが、有難いことに、在住三十八年の間に、一五〇〇人以上の死に立ち合い、七百五十組に及ぶ結婚を司式し、二千五百回を越えるラジオ放送などを通し、又八年間の『ハワイ仏教』誌の編集やいろいろな人々とのふれ合いを通して、あまりにも多くを学ばせて頂いた。

過去にとらわれることなく、未来への氣掛

りを離れて、今日只今を心開いてよりよく生きることを。やがて足迹に花ひらくであろう道を心をこめて歩むことこそ吾が生甲斐であり、それが又アマタ仏の生命を生かして頂く所以であると信じ、六十五才を過ぎて輝いて生きる為に、大宇宙の官^{かん}只一つ生命を育^{はぐ}む地球と言う美しい惑星を破滅させない為にも……と考えて、国連のNGOプロジェクト、「国際緑十字」の発会式、京都会議に向けて帰国した訳である。

(未完)
(滋賀・清久寺)

もうすぐ七五三を迎えます。

可愛らしく着飾ったお子さんたちが、お父さんやお母さんに手を引かれて、あるいはだっこされてはいるほのぼのとした姿が、今年もあちらこちらで見られるようになります。

親御さんであれば、誰しも我が子の健やかな成長を、そして立派な人間になって欲しいと願わない人はいません。そのため時には褒め、時には叱り、限り無い愛情を注いで、懸命に育てようとしています。この時期、子供さんを連れて神社やお寺の境内で掌を合わせている親御さんの背中から、その胸の内がひしひしと伝わって参ります。

「どうか、健康で、いい子に育ちますように…」

若和尚の

八 其 し な は い い ト ツ ヨ チ

ところで、学習というのは、まず誰かのしていることをまねることから始まるとよく言われます。まだわずかしが話せないような小さな子供の言葉づかい、行動に、何気ない親の口癖やしぐさが現れているのを目にすると、本当にその通りだなと感心させられたりもします。それを見た親御さんは少なからず驚くことでしょうが、きつとそれはほんの一部で、おそらくはもっともっとたくさん知ることを知らず知らずのうちに覚え、そしてまねているはずで。

子供にしてみれば、直接言葉で褒められたり叱られたりしたことよりも、親の背中を見て学ぶことのほうがどれほど多いかわかりません。親の常日頃の行

動や言動が、いかに大きな影響力を持っているかをあらためて認識しないわけにはいかないと思うのです。

さらには、家庭という限られた範囲だけのことでありません。幼稚園や学校への行き帰りに目にする人、もの全てが、善くも悪くも子供のお手本となっているのではないのでしょうか。

今朝、お仏壇にご飯とお水をあげ、お線香を立て、掌を合わせてお参りをしたお父さん、お母さんの背中に、子供は何を感じ、何を学んだのでしょうか。言葉では伝え切れない大切なものを教える——このことを今一度考え直してみたいと思います。

(正)

表紙は語る
共に生きる
ブナ原生林から

●
本紙表紙写真／文
御戸野洋幸



森は水を貯え、土壌を作る。

地球温暖化の原因になっている二酸化炭素を吸収し、鳥獣を育て、プランクトンや虫の育成まで行い、結果的には魚類も保護している。

その森の働きの要、それがブナの原生林なのだ。

樹齢150年のブナ1本で、約8トンの水を貯え、ヘクタールあたり年間10トン近い葉を落とすという。

雨が地表を走ることさえ抑えて洪水を防ぐブナ。果実は鳥獣を養い、落葉は土を肥やし、山菜や他の野草を育てるブナ。森の母、森の医者と呼ばれるブナ。そのブナと共に生き、写真を撮り続けるひとりの写真家がいる。

私の撮影地奥森吉は森吉山の北東麓である。森吉山は標高千四百五十四メートルの山で秋田県の中央東部北緯四十度に位置し森吉町と阿仁町に跨がる約二十キロ四方に広がる山域をもち、その一万五千ヘクタールが果立自然公園に指定されている。その尾根づたいに国の天然記念物に指定されている杉がある。

桃洞杉（森吉町側）と佐渡杉（阿仁町側）

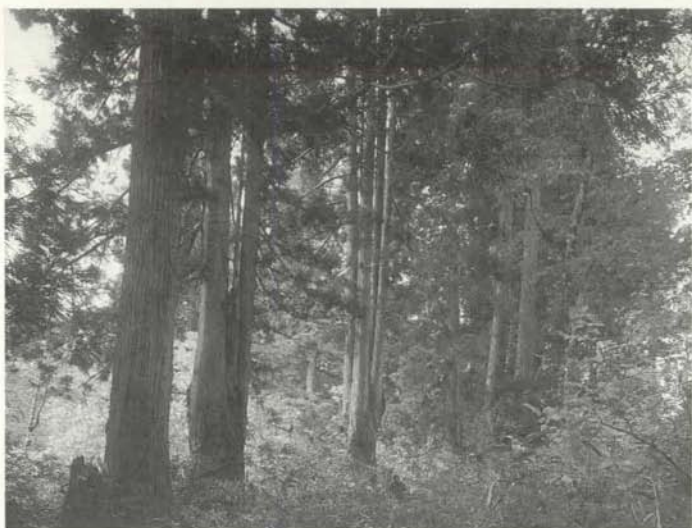
である。通常の秋田杉は海拔七百メートル以下に分布しているが、この杉は海拔八百メートルから千メートルの高山で豪雪寒冷地であり耐寒耐雪品種の杉である。伏状枝が発達しているのが特徴でブナ・ナラ・ヒメコマツなどと混生している。見に行ってみた。

ノロ川林道の行き止りで車を降りると二十分程で桃洞杉に着く。

オー、と感嘆の声が出た。見ごとである。ブナやナラが葉を落して明るくなった林の中で緑のまま、堂堂とそびえ立っている。直径二メートル近い一本の幹の途中から三、四本

の幹に分かれているものや、数本群になっているものなど変化に富んだ杉の巨木群だ。そしてどれもが杉独特の姿で直つすぐ上にのびている。海拔九百メートルの豪雪寒冷地でこんな大木に、と木の生命力に驚き入る。正に天然の杉だ。樹皮も堅く締つていて逞しく、この杉を見ていると今迄私の知っている美しい秋田杉は温室の杉に思えてくる。幹の分かれている所には苔がひろがりその中から二十センチ程のヒメコマツが木枯しをうけ絶え間なく揺れている。いまにも雪を運んできそうな冷い風だ。

平成三年十一月十一日、林の中はほとんど葉が落ちて明るくなり一面枯葉のジュータンだ。一足ごとにガサガサと音を立て霜柱と木の葉が折れるそのたびごと枯葉の香りが足元から全身にまといつく、明るくなった林の中で台風十九号の被害の大きさをあらためて知る。しかし倒木の多い所でも若木も古い木も残っている。古い木で残っている木はちよっ



と見には姿形はよくないがしっかりと根を張り幹の根本も太く枝先はまわりの木々と協調しているかのようにバランスもよく余分にのびていない、『おばちゃんの木』とにている。

幹と幹、枝と枝それぞれが適度の間隔をもち互に譲り合っている様に見える。十月撮影予定だったブナは直径八十センチ程で木肌も美しく、枝葉は幹を中心に四方に同じ様に広がり見映えの良い木であった。しかし根は浅く一メートル程の土をつけたまま倒れている。

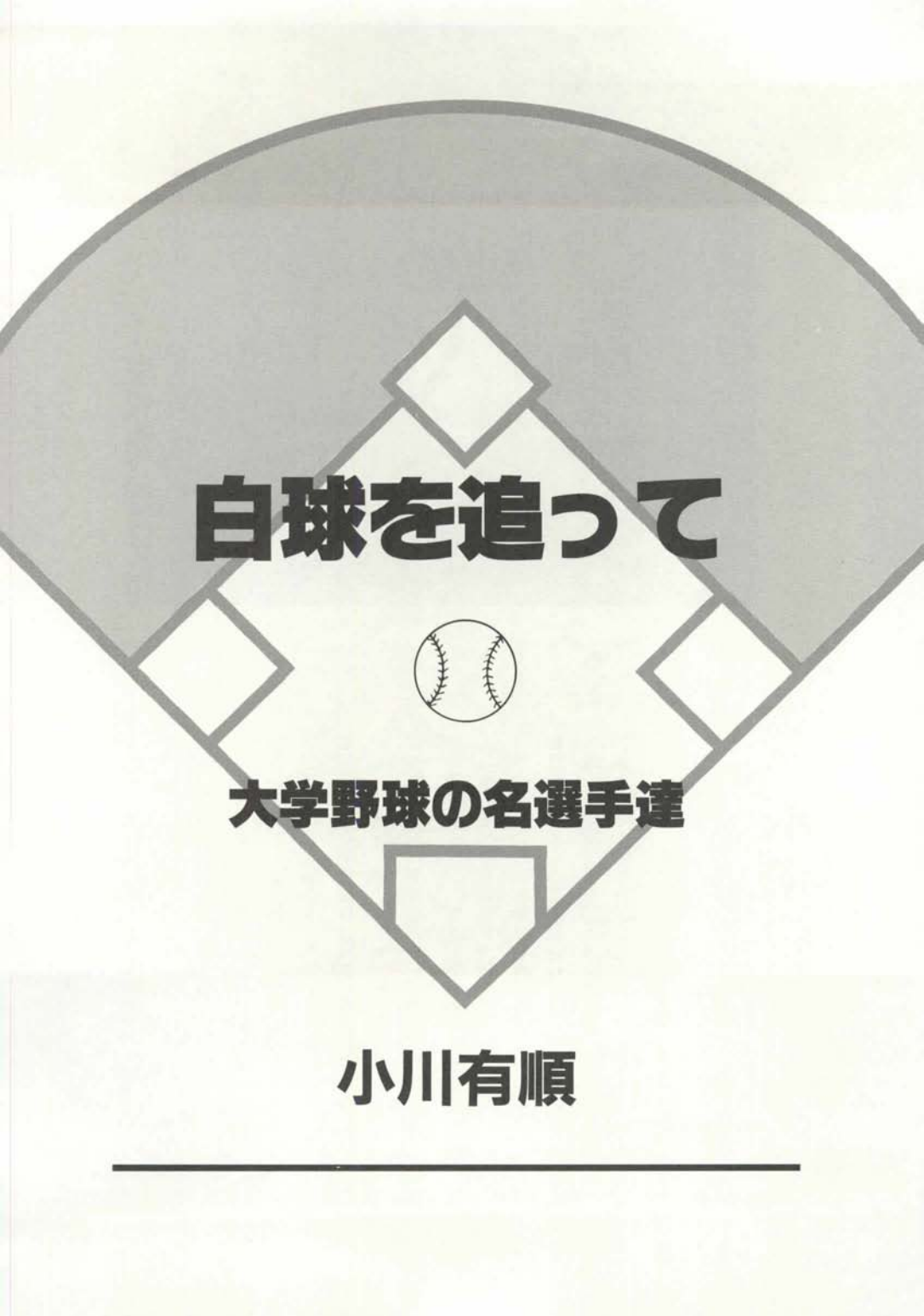
幹の太さにしては根は浅く広がりも少ない。改めて繰り返し木は私に生きかたを教えている。

葉を落した木々は自分の姿を完全にさらけ出している。同じ環境なのに太さは同じでも姿形は全部違う。素直にのびた木、途中にこぶのある木、S字やL字形、大きい木に寄り添い細くひよろひよろとのびた木、一本一本ゆっくり見ていくうちに木の形から、これはK君だ、この木はYさんに似ているなどと友



人知人の顔が木とダブる。熊除けの歌を歌いながら林の中を歩き回る。

冬の寒さから若い葉を保護するために厚く堅い皮に包まれた冬芽、大きいのがホオノ木、小さいのがブナとナラ、カエデはその中ぐらいいだ、それも同じようにセビヤ色でゆれている。甲虫類や半翅類には成虫で冬を越すものが多い。脂肪やグリコーゲンをたくわえ少しづつこれを使い生きているものや、グリコーゲンをグリセリンに変え仮死状態で冬を越すものもある。半翅類のチャバネアオカメムシはドングリの袴に身をひそめている。山の生物達は冬こもりの準備が終わったようだ。時折吹く冷い風が足元の枯葉を舞い上げる。今夜は雪になりそうだ。

A stylized diagram of a baseball field, showing the diamond and bases. The infield is a light gray diamond shape, and the outfield is a darker gray semi-circle. The bases are marked with small white squares.

白球を追って



大学野球の名選手達

小川有順

今年八月の初旬の朝刊に一人の計報が掲載されていた。若原正蔵氏である。若い人達にはあまり馴染みもなからうが、昭和十年頃の早稲田大学野球部の投手として名を馳せた人物である。あの頃はプロ野球と呼ばず職業野球と呼ばれ、人気の程も東京六大学野球に較べたら月とスッポンの違いがあり、当時一冊一円の『野球界』の表紙も巻頭のグラビア写真もすべて大学野球の選手ばかりで占められていた。今では想像もつくまいが、ことに早慶戦ともなるとそれこそ天下を二分するほどの人気があり、神宮球場の入場券を手に入れるのは大変なものであった。若原投手は長身でなかなかの好男子だったから実力もさることながら下手な俳優などよりよほどたくさんファンもいたようである。若原が活躍していた当時、私はまだ小学生だったが、どういうわけか私の周囲には早稲田の出身者が大勢いて、ルールなどろくに知らなかった私も自然に早稲田を応援するようになり、それが高



じて大卒の相撲取りでは只一人、しかも早稲田出の笠置山という人がいたのでそのファンにもなってしまうた。若原氏の享年は八十歳と記されていたから、彼の活躍期はちょうど二十歳代だったということになる。昨年寺報の秋号に、私は以下のような文章を書いている。——私にとって我慢ならないのは試合中の選手のガッツポーズがやたらと多すぎることである。ヒットを一本打ったといつては天を突き上げる仕草をするし、ホームランを打ったればベースを回る間中、拳を高々と挙げて「ほれみろ」といわんばかりにアピールする。私も物心のついた昭和十年頃から野球の試合をすいぶん見てきたつもりだが、少なくとも戦前はもとより、昭和四十年代くらいまではあんなことをする選手など一人もいなかったはずである。(中略) 打ったら打たれた者の身になる、勝ったら負けたチームの口惜しさもよくわきまえば、決してあんなブザマなポーズなどはとれないはず

である。近頃は野球ばかりか人気のサツカーなどもそうしたシーンの連続でがっかりするが、大昔からの観客ならそんな自慢げなポーズをしなくても必ず拍手はする。――

そう、まさに昔の野球ゲームではそうしたガッツポーズをする選手など見かけた記憶は一度もない。応援も観客の多いわりには全体が肅々と統制のとれたものだったし、女子学生も数えるほどしかいなかったせいかチアガールの派手な踊りなど皆無だった。しかしそれでも選手達はほとんど表情一つ変えず文字どおり白球をひたすら追い、ひたすら打つことにのみ専念していた。私は子供心にも、あの数万人を呑みこむ球場でまるで剣道の試合をみせられているような真剣さが充満していたのをはつきり覚えていたのである。後年、私自身が早稲田に入学して、あれは昭和二十何年の春だか秋だか、いつもは必ずといっては失礼だが東大が六位と決まっているのに、早稲田大学が野球部創部以来初めてテール・



エンド（最下位）を味わったシーズンがあったが、その折の早慶戦は当然ながらボロ負けに負け十点以上の差がついてしまった。すると相手校慶応の応援席の全員が立ち上がり、なんと「頑張れ 頑張れ 早稲田」の大声援が起こったのである。宿敵のあまりの不甲斐なさに期せずしての奮起を促す声ととるか、それともバカにされたものとするかは人それぞれだろうが、その時、誰からともなく、「今はシベリアに抑留されているけれど、そのうちきつと還ってくる優秀なピッチャーがいる。そいつさえ帰国してきたらこの屈辱はきつとはらせる」という噂が流れはじめた。申すまでもなく野球は一人でするものではなくチームプレーである。たかが一人の選手が帰ったくらいで本当に勝つことができるのか、といった疑問は誰しもが抱くに違いないのだが、しかし奇跡は確実に起こったのである。学徒出陣に加え、シベリアでの不条理な抑留生活が加わったから年齢は私などより二、三年は上

だったが、ろくな練習期間もないままに次のシーズンでは主戦投手としてマウンドに立ち、打てば四番で豪打を披露してくれた結果、なんとビリから一位に返り咲いてしまったのである。その投手こそ、昨年、アマチュア野球から唯一、野球殿堂入りを果たした石井藤吉郎氏であった。今は茨城の大洗で旅館を営んでいると聞いたが、考えてみれば先に記した若原投手のほぼ十年余の後輩ということになるのであろう。若原氏は八十年の寿命を全う



したが、同じ早稲田の松井、小野、慶応の楠本、法政の松下など、名選手といわれた人々の多くが太平洋戦争で戦死をしてしまった。今年も、甲子園では高校野球が行われたが、できればあの選手全部が無事で、平和に人生を全うしてほしいと心から願わずにはいられないのである。

(東京府中・蓮宝寺住職・芝中・高校校長)

京都一千年の歴史に

育まれた巧みの技

京仏壇・佛具は当店に!!

☎六二五 京都市右京区

西京極南衣手町七四

(株)島津法衣佛具店

☎〇七五―三一四―七七六八

FAX 〇七五―三一五―三七五三

浄土宗と
卓球界

佐藤行信

こんな題で書かせていただくと、皆様は大変おどろかれると思いますが、実は大正大学の前身の宗教大学、これは浄土宗だけの大学でした。現在の大正大学は、浄土宗、天台宗、

真言(豊山)、真言(智山)の三宗四派の大学です。その宗教大学時代から卓球はやっておりました。大正大学は大正十五年に創立されておりますが、宗教大学時代、大正二年に卓球の試合を宗教大学がやっている記録があります。その頃は三球連盟と云って、宗教大学、東京歯科、東京農大と三校でやっておりました。人はお坊さんの大学と、歯医者さんの大学と、農家の方の大学が卓球をやっていたと云っていました。それが現在は男女合せ計百五十一校(男子八十九校、女子六十二校)になり、関東学生卓球連盟となっています。

このように大正大学の卓球部の歴史は宗教大学からのものであります。ですから知恩院の執事をなさった千々和上人は、関東学生卓球選手権で優勝なさったり、現在青森正覚

寺の御住職の楠美知行上人も卓球部で活躍され、のち青森県の卓球協会の会長もなさり、現在も日本卓球協会のために大変御尽力をいたしております。

また先年亡くなった東京正覚院稲田稔界上人も、卓球部の選手として、また監督としてのちにOB会長として、大正大学卓球部にお力をいただきました。また、神戸の中川浩安上人、里見達人上人(大正大学常任理事)、新潟の藤田説量上人、埼玉の落合上人、長寿院の北川一有上人、信入院の渡辺一雄上人、神奈川の橋下上人、大阪上宮学園小林理事長等、浄土宗のOBは枚挙にいとまがありません。相沢氏、玉木氏、中島氏等、別に浄土宗と関係がない、名選手もありましたが、昭和三十年迄はどちらかと云うと寺院関係者が多く卓球部に関係しておりました。大正大学になってからはもう亡くなりましたが、天台宗の吉田上人、(元大正大学理事長、元卓球部長、生方上人(天台宗)等も活躍されています。

宗教大学時代は白衣でタスキかけて、ラケットを握って卓球を素足でやっておったそうです。このように大正大学卓球部の歴史に宗教大学以来浄土宗の関係者が数多く関係しております。

また浄土宗では神奈川県鎌倉組岩瀬上人、山口上人、他宗では真言宗智山派出身では現在埼玉工業大学に勤務している福島氏（埼玉県卓球協会理事長）茨城の奥田氏、埼玉の高橋上人、時宗では宇都宮の清水上人、また大正大学教授の浄土宗、宇高先生、淑徳短期大学の浄土宗白井先生、愛知県の本木氏、埼玉の浄土宗本庄の石田上人など寺院関係者は枚挙にいとまがありません。

小生が大正大学卓球に関係したのは今から二十五年前です。別に選手でもなかったのですが、父が大正大学の卓球部長を昭和十七年からやっていた関係で、丁度大学に小生が勤務したので、父のあとを継ぐ女子の卓球部長になりました。この件には渡辺元監督（浄

土宗）がつよく推選してくれました。当時男子は吉田部長（天台宗）でしたが、吉田部長はご多忙で、結局小生が男女とも面倒をみることになりました。父が昭和十七年に部長になったのは、それまで監督兼部長の稲田上人が出征されたからだそうです。

小生がおあづかりしました頃は、男子は二部と一部を行ったり来たり、女子は一度小生の来る前に一部に上がったようですが、当時は三部でした。ところで関東学連は一部は男女とも六校、二部も男女とも六校でその三部は男女とも十二校ずつで六部まであります。現在女子は五部迄です。

当時は現在、埼玉県の秩父にある真言宗智山派の岩上上人がコーチ、のちに監督になりました。丁度此の頃より寺院関係者は減り、現在でも部に二人程浄土宗の寺院子弟がおりますが、現在の大正大学は一学年の学生数八百人のうち、寺院関係者が百名を少し上回る位です。それで卓球で優秀な選手は、体

育奨学生で入学してまいりますので、女子にいたっては宗門関係者は一人もおりません。

しかし、浄土宗の宗立学校および関係学校は卓球が強いので、その高等学校の出身者が数多くいます。現在埼玉工業大学深谷高校、また卒業生の中には、大阪上宮高校、京都東山高校、女子では淑徳高校、淑徳学園高校の卒業生がおります。また浄土宗の高校では樹徳高校、華頂女子高校、名古屋東海高校等が各大学卓球部で現在活躍しておったり、卒業生がいたりしています。

大学でも宗門関係では、埼玉工業大学が関東二部で、女子では淑徳女子短期大学は関東一部で活躍しております。先日の全日本大学選手権には、関西学連代表として佛教大学も出場しております。

現在の大正大学は、男女とも、十八年間一部におりますし、その間に男子は三回、女子も四回優勝し、このところおかげさまで安定しております。現在ではだいたい世間一般の高

校にも名が知れ、関東学連の一部で活躍してみたいと云う全国の高校生が、受験してきてくれております。

運動部と云うものは、卓球だけにきざらず強くするのは大変です。並大抵でない努力が必要です。

大正大学では、空手、カヌー、卓球を運動部御三家と申しております。

大正大学もこの頃大変入学困難になり、約一万名程受験して入学するのは八百名です。で、学校が理解して下さっている体育推薦学生以外の学生は、毎年二人位で、合格してこない年もあります。受験しているのは十名位いるようですが、これだけ大学の入学は困難です。

この二、三年程前から、仏教系大学の卓球大会を始めました。以前には仏学連卓球大会と云うのがあったそうですが、現在は東北福祉大学（宮城県仙台市曹洞宗）、埼玉工業大学（浄土宗）、駒沢大学（曹洞宗）、竜谷大学（京

都府浄土真宗本願寺派」と大正大学で、年一回、二月に各校順番で当番校になり、チーム戦と個人戦を一泊二日でやっており、交流を深めております。希望があれば立正大学、佛教大学とも交流をもちたいと思います。女子も東北福祉大学、淑徳短期大学、竜谷大学、大正大学などありますので、この三校に呼びかけ、全国の仏教系大学の交流を深めたいと思います。ある程度の力がそろってこない、以前にあった仏学連のように、つぶれてしまっていますので、全国の仏教系大学の力の平均をみながら、卓球部があり、全国大会を目指している卓球部に呼びかけたいと思います。

埼玉工業大学の松川理事長は、現在財団法人日本卓球協会の専務理事を、日本卓球協会会長の石川六郎氏（鹿島建設会長）に依頼されやっております。また浄土宗には、山田尙孝氏という静岡の来迎院の御住職が、お自身も専修大学で有名な選手でしたが、静岡県卓球協会の会長であり、現在日本の高齢者の

卓球大会（世界ベテラン大会）のリーダーとして活躍しております。また来年第五十一回国民体育大会は広島で行われます。そこには、広島、府中に西雲寺住職金子上人という東山高校から、仏教大学を出た熱心な指導者があります。

埼玉工業大学の松川理事長にいたっては、卓球を浄土宗門学校のメーンスポーツにしようとして下さっております。小生の地元鎌倉で浄土宗の貞宗寺の山口上人が鎌倉卓球協会の会長をし、御子息の大正大学出身の山口円誓君が神奈川で一番強い男子の高校、湘南工科大学付属高校のコーチとして頑張っております。

小生の関係しております、関東学連の伊沢副会長は、名古屋の東海高校、早大の出身で、現在シチズン時計卓球部の部長をしております。

現在大正大学の出身者では、日産自動車の佐藤監督、選手では、戸田選手、小泉選手、

斉藤選手、大阪グランプリの皆川選手、また女子の選手では、さくら銀行に小泉選手、藤村選手、十六銀行の宇佐美選手等、また高校の指導者としては、東奥の吉田鑑光先生が活躍しています。

大正大学は平成十年に卓球部創部、宗教大
学よりかぞえて八十五年になります。現在、
その八十五年を迎えるべくチームを強化して
おります。おそらく来年も今年同様に力を発
揮出来ると思います。

大正大学は良い練習場をつくっていただき、
体育奨学生等、学校の理解があつて卓球部の
今日があるのです。あとよい指導者のもとに
素質のある選手を集めることに努力すれば強
くなります。

現在大正大学に仲村錦次郎君という二年生
の選手がおります。この選手の素質はたぐい
まれません。是非この選手をもつて世界選手権
オリンピックを目指したいものです。

浄土宗門の高校が強いのは、そこに有能な

指導者がいるからです。埼玉深谷には吉田先
生、東山高校には今井先生、上宮高校には田
中先生がおられました。東山高校の今井先生
はご健在ですが、吉田先生は本年の春で監督
を引退され、田中先生は不治の病い、がんで
先般なくなられました。このあとをつぐ後継
者の埼玉の斉藤先生、上宮の河野先生のこれ
からの努力に、埼玉、上宮の勝負がか、つて
います。

吉田、田中先生が育てた選手が、明大の田
崎君（埼玉深谷）、倉島君（埼玉深谷）、遊沢君
（上宮高）、専修大学の村上君（埼玉深谷）、佐
藤君（埼玉深谷）、大正大の渡辺君（埼玉深
谷）、木村君（埼玉深谷）、三原君（埼玉深谷）
等です。

小生も現在、財団法人日本卓球協会の役員
と関東学連、大正大学の部長、埼玉工業大学、
高校の相談役をやっています。

卓球と云う競技はメンタルなところがあるス
ポーツで、台の上で相手の顔がよくわかると

ころでやっておりますので、表情もはつきりと見えます。よく小生は選手に、サーブを出すとき落ち着いて出さない、心を落ち着けるために、あなたの宗教、浄土宗なら、南無阿弥陀仏を口稱してから出なさいと申します。特に精神的に弱く、練習の状態の半分以下の実力しか出ない選手もおります。このような選手には、お念仏をさせるとか、精神修行をさせる必要があります。気が弱いのをなおすにはまず勝つことです。

なかなか一部と二部との間には壁があり、簡単に突破する大学も、たまにはありますが、大部分の学校は、一部に定着するまでが時間がかかり大変です。

埼玉工業大学においては、一日も早く関東一部に昇格して欲しいと思っています。

(鎌倉・高徳院副住職・日本卓球協会副会長)



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

ＴＶウォッチング、紀行文その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。

どしどし編集部にお寄せ下さい。

「人の死とは、かくなるものなのか……」

これがその日見た後の最初の素直な感想だった。

「これいいのだろうか……?」

病院から霊安室へ

蓮門・テレビ小僧

NHKの朝の連続テレビ小説。読者諸氏の中にもご覧になっている方は少なくないことと思う。

小生、時間の関係であまり見たことはなく、そのため、たまに見ることがあっても内容がつかないで戸惑うことが多かった。しかし最近、生活に時間的な余裕が出てきたのか（単にルーズになっただけなのか？）以前よりは見る機会が多くなった。そうなるとうしても、明日はどうなるのか？ 気がなり、ついつい見てしまうようになる。

ひと月ほど前に放映を終えた「春よ来い」。原作者と出演者との間でのすれちがいがあつたりで、ずいぶんと苦心されたようだが、なかなかどうして小生には見どころのあるドラマに思えた。

しばらく前から主人公の夫が病で入院を繰り返すという話になっていた。「肋膜炎」を患っているということになっていたようだが、後に癌であることが発覚した。病院側から余命数か月であることを知らされた妻の思い、夫に事実を話すべきか

否かの葛藤……。妻は後者を選び、あくまで隠し通すことを決意し、周囲の者にその旨を告げる。

ここで、あえて小生はその妻の選択に対して安易にどうこう言うつもりはない。私は彼女自身になりきれはせず、よってブラウン管の外側からその決断をにわかに判するなど出来ようはずもない。もつとも、小生がその場に居合わせた当事者であつたならば話は別だが……。癌に限らずとも「ほんとうのことを話す」「告知」というテーマはなぜか好きになれない。ことが周囲の者にとつていかに辛いことか（もちろん「ほんとうのことを話さない」ことも同じくらいに、いや、もしかするとそれ以上に辛いであろう、また時にそれが、安堵感を与えるケースがあるにしても、大体的な場合は、完治を信じている患者にとつて「ほんとうのことを話される」ことがどれほどの苦悩を伴うか、はかりしれないものがある。

ドラマもいよいよ終焉に近づいた頃、夫は亡くなった。夫は程なくして病室から霊安室へと移され、妻はなるべく早く荷物の整理をして病室を引き払うよう、看護婦から告げられる。さらには、

間髪を入れずに訪れた主治医から、遺体を解剖させて欲しいとの話が持ち込まれ、ろくな説明もないうまま同意書にサインを求められる。そして、何が何だか事態を把握していないままそれに応じてペンを執る妻……。

この病室でのことを見て、何か喉につかえたような感を受けたのは、おそらく小生だけではないであろう。果たしてあのように、きれいなまでにスムーズに、事務的に、実際の現場においても行われているのだろうか？ そう思った途端、背中に冷たいものが流れるのを感じないわけにいかなかった。反対に、淡々と話す看護婦と主治医のいるあの病室からは何ら血肉の通ったあたたかみのあるものの存在は感じ取れなかった。「出来ればこの中だけの話であって欲しい……」。変な期待が胸をよぎったが、現実はどうなのだろうか？ 読者諸氏はどのような感想をお受けになったであろうか。ただ単に小生の考え過ぎ、取り越し苦労なのであるか？ しかし……。「これはドラマだ」と簡単ににかたづけしてしまうこと勿れ。同様の「シーン」は今日もどこかの病院で目の当たりにすることの出

来る「ノンフィクション」である可能性は誰にも否定できないはずである。

次の場面は、葬儀も終わり、真っ白な布をかぶせられた遺骨箱が自宅の中庭壇にまつられるところであった。その間わずか数分。あまりにも駆け足で通り過ぎて行ってしまった「人生の一大事」であった。見ている者の目には、さして問題もなく数日が過ぎたと、何気なく映った可能性もある。しかし、その裏、見えない部分、時間には「ドラマだから……」とカタづけきれない、否、カタづけではならない「重み」が存しているのである。主人公をはじめ、取り巻いている人たちの心境を思うとき、それは容易に証明することができる。かの立花隆氏がその著書『臨死体験・上』(文藝春秋社)の中で、膨大な時間の取材をしてもテレビというメディアを通して我々が見ることの出来るのは、その制約上、ほんの一部である、という旨を述べておられる。つまり、見える部分のみでこと終われりと思ひ込んでしまうことに大変な危険性があるということを言っておられるのである(と小生は受け止めた)。もともと、『春よ来い』は

ドキュメンタリーではないから、原作者の意向でそのような「流れ」にしたのかどうかはわからない。病室でのあいつた出来事も、看護婦や主治医の話方、表情も、原作者をはじめとするスタッフの何か思い入れが、あるいは故意的な演出が加わっていないとも確約は出来ない。

その意味では、あのようなケースの場合、つまり患者が亡くなった場合に、どこの病院でも、医師、看護婦がこのドラマと同じように遺族に対応し、同じような出来事が繰り返されているなどとはもちろん言えない。それは有り得ない。従って、このドラマのこういうケースのみを見ただけで、あたかもそれが全てであるかのようにとらえるのは、大変な過ちを犯すことになるし、また小生も安易に医療のあり方を問うような発言をしようとは思わない。しかし、いずれにせよ、とてもブラウン管の中だけでの出来事とは思えない何かをこの一話から感じたのである。月並みな文章展開とお叱りを受けそうであるがここで『我々は僧侶として……』という問題提起をしなくてはならない。我々は、先に記した病室で

の出来事のような現場には、おそらく今まではほとんど遭遇することはなかったであろうし、これからもうさうかもしれない。あの、何とも表現しがたい、薄ら寒い「シーン」が済んだ後の、葬儀というしつらえられた（と、自分が主役であるかのような勘違いを気づかないうちにしている）「舞台」に招かれているといった錯覚を持っているとしたら、それはあまりにも危険である。

医療従事者には医療従事者の、宗教者には宗教者の受け持つ範囲は確かにある。しかし、生から死へと向かっていくその本人にとって、「二者の受け持ち範囲を「生と死」という、あたかもそれが相反するものかのよう、二元的な枠組み設定をした上に決められるとしたら、こんな迷惑は他にはない。それは、「生」の守備範囲は医療従事者、「死」の守備範囲は宗教者であるといったような著しく本筋を反れた、誤った認識のもとになされることと言えよう。「生死」は分断したものではなく、むしろ連続しているのである。だからといって何も両者が互いの範囲の中に、無理やり入り込むことが必要であるというのではない。宗教者皆

が医学の専門的な知識を学ぶのは難しいであろうし、医療従事者にとっても宗教を学ぶのは簡単なことではないであろう。まして、その場合、キリスト教か仏教か、仏教ならばどの宗旨の教えか、といった問題が出てこないとも限らない。

恥ずかしながら、小生、まったくの浅学につき、読者諸氏にこれと言った目新しいことを提供するとは出来ない。話がやささか論文的になつてきたきらいがあるが、それが本意でもない。しかし、少なくとも、もつともつと我々は死に対する認識を自らも深める必要があるし、そのことを声を大にして説いていかななくてはならないと、今更ながらに思うのである。

こんなことは、既に遙か昔から言われ続け、今日では誰でもが耳にしていることかもしれない。「また同じこと言ってるよ。そんな声も聞こえてきそうである。しかし、昔言われ出したことなのに、今現在もそれが言われ続けているということ、それはそれだけ大きな、重い、且つ難解な、ある意味では永遠のテーマであることの証ではないだろうか。病に倒れ、苦しみ悩み、死を迎える人々は我々

自身も含め、これからも永遠になくならないのであるから。決して客観的問題ではないのである。

こう考えてくると、我々の浄土教の偉大さ、素晴らしいさを感じないわけにはいかない。先頃、毒舌で有名な人気タレントが一冊の本を著した。どうやら「昨今、戦後五十年」といつて何だかんだと騒いでいるのがいい加減にしろ、何の意味がある、そんなのは婆さんが念仏を称えるようなものだ」といった体の御主張のようであるが、本当にそんな考えを持っているのであれば、それは大きな間違いであるし、きわめて危険でもある。と同時に、仮に同じような考えをしている人がいるとするならば、その責任は少なからず我々の側になんとも言えないのであろう。

浄土教、お念仏の教えは、生死に対する我々の問いかけに対し、その答えを明示してくれるものに違いない——そんな恵い、自信と誇りを新たに、また、自ら担っている責務の大きさと重さを思い知らされた、小生にとっては長い長い十五分間であった。

晩秋〜冬

誌 上 投 句

秋深し山の彩り日々に濃く
一つ消えまた一つ消ゆ祭りの日

児玉良男（静岡）

雪もよひ別れの愛語背よりうく
祈りの灯静かに雪の窓みがく

良誉一慧（埼玉）

風の声風ひるがへる葛の花
秋草を手向くちははあねおとと

児玉仁良（埼玉）

●J・FORUM（浄土フォーラム）

ご好評を頂いております、皆様のためのコーナー（J・FORUM）。毎月、投句、投稿を頂いておりますが、編集部ではもともとたくさんの方の作品を、お待ちしております。短歌や俳句、書評随筆や詩、身近な出来事や情報など、先の特集でほとんどご応募ください。私たち編集部では、読書の皆さんと一緒に、この『浄土』をより楽しく、すばらしいものにしていきたいと考えております。

1 随筆・歌など：四百字詰め原稿用紙十枚以内
2 俳句・短歌・川柳など：二首まで
3 その他、本誌の体裁や掲載記事に対するご意見やご感想など、何なりと気軽にお聞かせ下さい。

：適宜

タイトルは自由です。投稿は随時受け付けておりますが、採否に関しては編集部にご一任下さい。また、原稿は返却いたしませんので必ずコピーをおとりの上お送り下さい。採用分については記念品を進呈いたします。

●読者アンケートのお願い

編集部では「浄土」のより一層の充実を図るために、皆様にアンケートをお願いしております。十一月号でもっともよかった記事。

2 今後、掲載してもらいたい記事、希望する内容
3 法然上人讃仰会の活動として望むこと。
4 その他、ご意見、ご感想など。官製はがきまたはFAXで事務局までお送り下さい。もれなく記念品を差し上げます。どうぞご協力お願いします。（住所、氏名、電話番号をお忘れなく）

●新規会員募集のお知らせ

当会では随時新規会員を募集しています。檀信徒、お知り合いの方々にも本誌のご購読をお勧め下さい。年会費は六千円です。また、ご寺院の皆様方にはなるべく一般会員へのご入会をお願いさせて頂いております（年会費三万円）。一般会員の方には本誌を毎号五部お送りしています。

また、お友達への贈りものになされてみてはいかがでしょうか。ご贈呈先のご住所、お名前をお知

らせ下さい。あなたからのプレゼントであること
をお伝えして発送させて頂きます。きつとあなた
のあたにかいまころが伝わるでしょう。

●新規会員登録(敬称略、順不同)

〈購読会員〉

*神奈川 横浜市 渡辺孝一郎

*神奈川 逗子市 堀越 喜美

*東京 板橋区 青木 東正

*東京 新宿区 吉田 芳三

〈お詫びと訂正〉 十月号新規会員登録で、上

尾市宇高一薫は、宇高一慧様の誤りでした。訂正
しお詫びいたします。

●会費ご請求のお知らせ

近日、平成七年度会費をまだお納め頂いていな
い方へご請求をさせて頂きましたので、同封の振込用
紙にて、忘れずに、お早めにご送金下さいませよ
うお願い致します。なお、ご不明の点はお尋ね下
さい。

●バックナンバーのご案内

一昨年四月号以降のバックナンバーがございま
す。ご希望の方、また掲載内容をお知りになりた
い方お問い合わせ下さい。なお、一九九四年二、
五、十一月号は残部僅少につき、お分けすること
ができませんので、あらかじめご了承下さい。

●一月号予告

国際的仏教学者であり、現在東方学院院长、東
京大学名誉教授の中村元博士に、当編集部スタッ
フがお話をお伺いしました。

生い立ちから、インド哲学を志したいきさつや、
現在博士の仏教、法然上人に寄せる思い、世界平
和への願いなど、他では聞くことができない博士
のお心を紹介します。

アンケート、お問い合わせ、投稿は……

法然上人鑽仰会

〒一〇五 東京都港区芝公園四―七―四

明照会館内

TEL 〇二―三五七八―六九四七

FAX 〇二―三五七八―七〇二六



冬隣月みる人に憂いなし

岱潤

日一日と朝晩寒さを感じ、月がますます美しくかやいて見える気がいたします。まさにこの時期は、宗祖の『月影』の心をいたたく、絶好の季節のようです。

前門主藤井実心台下に御揮号いただいた書に、「月ひとつ、水の浅い深いを嫌うことなく、万水に浮かぶ」という書がありました。

宗祖の昔より、我が宗門では阿弥陀仏は『月』に喩えられることが多いようです。少々肌寒い晩秋の夜長、月を静かに見つめているだけで、信仰心が高まってくるように感じられます。

人生を季節に喩える言い方があります。青春時代はまさに人生の春ということになります。それでは白秋、いえ十一月という晩秋はまさに冬隣となりますが、現代ではいくつぐらいを指すのでしょうか。

昔は五十歳を越えたらもう冬だったかもしれませんが、平均寿命が八十歳を越える現代、先月号お話した金さん銀さんのように、百歳を過ぎててもまだ、ご自身を老後と考えていない人々もいます。お弔いに行つて、「ご長寿を全うされた」と言つていい歳がまったく解らなくなつてきました。

年齢はまさに、その人によるとしか言えないようです。まして『天寿』などという言葉、数値的なことがあろうはずがありません。たとえ十代でも、亡くなった時がその人の『天寿』なのだということを理解することが、仏様の教であるとして最近つくづく考えさせられました。

つまり、いつでも晩秋であるという理解も必要であり、年齢に関係なく月を見ること、阿弥陀仏に気づくことが求められているのです。(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
村田洋一
太田正孝
石上俊教
オフィス顧問代表佐山哲郎

編集協力

編集顧問

大室了晴

浄土 六十一巻十一月号 頒価六百元
年間費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可
印刷——平成七年十月二十五日
発行——平成七年十一月一日

編集人——宮林昭彦

発行人——牧田諦亮

印刷所——株式会社 平文社

写真植字——株式会社 シーテイエー

〒二〇五 東京都港区芝公園四十七 四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三五七八)六九四七

FAX 〇三(三五七八)七〇三六



ノドうつ うまさ。 黒ラベル

ただいま、渴いています。ビールを欲しがっています。

ノドが、体が…。さて、黒ラベル。フッシュノゴクゴクゴクゴク…。

このうまさは、何なんだ。ノドたたく快感、
駆けぬける爽やかな味わい。1秒1秒が、
たまらない喜びに満ちている。

この黒ラベルの味、ひとことというところ？
「ノドうつ、うまさ」それが黒ラベルです。

ビールは、20歳になつてからあきかんはりサイクルへ

●協力のお願い：自動販売機による酒類の販売は午後1時から午前5時まで停止されています。

新デザイン缶



サッポロ〈黒〉黒ラベル

サッポロビール株式会社





使えるよなあ、こいつ。



こんどのパルサーは、 たのしい新実用主義。

いろいろな機能性、ヨロコビがあるのが新しいのだ、それが
こんどのパルサーのたのしい新実用主義。しっかり遊ぶ、
しっかり仕事する、しっかり生活する。Mr. しっかりのこれからを、
気持ちよくサポートします。

これ安心

■運転席SRSエアバッグ
システム全車標準装備。



走る走る

●発売、マルチリンクビームサスペンション(リヤ)、
●うれしい低燃費=1500X(13速フロアシフト)
18.3km/l、1500PZ-ZZ(4)ドライブシャフト15速
フロアシフト18.6km/l、10-15モード燃費
[運輸省公表値]

らくちん

●上置式の、しなやかな乗りこころ。
●ゆったり室内スペース。

ツイてる

●新型エアコン。
●トランク、ポケット等、収納性しゅうふ。

パルサー4ドアセダン
1500CJ-1(13速フロアシフト) **131.3万円**

パルサー4ドアセダン
1500X(13速フロアシフト) **148.4万円**

上記価格にはメーカーオプション(3点式シートベルト 13.1万円)が含まれておらず、

上記価格はいずれも全国メーカー希望小売価格(税・北海道・沖縄)

Mr. しっかり 新パルサー誕生

[Mr.しっかり] 日常フダン活用、①新パルサーの別名、②新パルサーに乗る人の愛称、
③～状態……新パルサーでたのしい人生を送っている様子。

●PHOTO：パルサー4ドアセダン1500X1、ボディカラーはブルーイッシュシルバーM(※KG1)、スポーツパッケージは
ターコイズグリーン、●希望小売価格はスペアタイヤ・標準工具付、東京都仕様は1.7万円増となります。●保険料、
税金(消費税込)、登録等に付く諸費用は別途申し受けます。●希望小売価格は参考価格です。価格は販売会社が
独自に決めていますのでそれぞれの販売会社にお問い合わせください。●日産自動車お客様相談室 全国共通
フリーダイヤル 0120-315-232 ●お求めは、お近くのスカイライン、ブルーバード、日産サテライト各販売会社へ。